

---

# アイドル探偵 9 「和彦の結婚」編

田中タロウ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アイドル探偵 9 「和彦の結婚」編

### 【Nコード】

N2850X

### 【作者名】

田中タロウ

### 【あらすじ】

アイドル探偵第9弾！トップアイドル・KAZU（和彦）が結婚！？寿々菜をはじめ、ファン達は大騒ぎ。ところが和彦の婚約者・栄子が突如ホテルから姿を消した。残された部屋は血まみれで・・・。

## 第1話 スクープ！

鳥居聡子、28歳。

身長164センチ、体重 キロ。

さらさらの黒髪と少し目尻が上がった瞳が、その聡明さと潔さを表している。

そんな鳥居の職業は、誰もが納得の婦人警官だ。しかも鳥居はノルマ達成のために違反切符を切りまくるような婦人警官ではなく、まさに「市民の味方」の名に恥じない婦人警官である。

警視庁捜査一課2年目の武上刑事にとっても良き先輩であり、公私共にお世話になっている。

が。そんな鳥居にも欠点、というか弱点がある。

それも武上に言わせれば、致命的とも言える弱点が。

「鳥居さん、どうしたんですか？」

警視庁内の食堂で昼食を取っていた武上は、扉から入ってきた鳥居を見て思わず声をかけた。

「ああ・・・武上君・・・こんばんは」

「・・・」

一応説明しておく、今は夜ではなく昼の12時である。鳥居がここまで元気がないのは珍しい。何かよほどのことがあったのだろう。

「落ち込んでますねー。鳥居さんが落ち込むなんて、原因はさてはKAZU関係ですね？」

武上の横でいつも通りサンドイッチを上品に食べている1年目のお坊ちゃま刑事・和田が鳥居にそう言つと、鳥居の顔つきが変わつた、かと思つたら。

「と、鳥居さん！泣かないで下さいよ！」

武上は慌てて箸を置き、テーブルの下で和田の足を踏みつけてから鳥居に駆け寄つた。鳥居が泣くなど、初めてのことだ。これは本当にただ事ではないらしい。

和彦の奴！鳥居さんに何かしたのか！？

「和彦」とは、和田が先ほど言っていた人気アイドル・KAZUのことである。

KAZUは世の女性達の心をわし掴みにしているだけでなく、武上が密かに（？）思いを寄せている女子高生・白木寿々菜（しゅうすな）の心も思いつきりわし掴んでおり、武上にとっては全くもって面白くない人物なのである。

しかしどういふ運命の悪戯か、武上は知り合いたくもないのに和彦と知り合いで、和彦の女癖の悪さはよく分かつている。だから鳥居に何かしたのではと心配したのだが、冷静に考えてみれば、人気アイドルと一般女性（しかも婦人警官）の間に何かあるわけもなく。

いや、和彦ならやりかねない！

武上は鳥居の両肩を掴んだ。

「鳥居さん！何かあつたんですか！？場合によっちゃ和彦を、」  
「・・・これ見て」

鳥居は鼻をすすりながら、肩に掛けていたショルダーバックから雑誌を取り出した。ファッション雑誌ではなく、毎週発行されているペラペラの「×セブン」である。ということはやはり和彦関係なのだろうか。

武上は鳥居から雑誌を受け取り、その表紙を見た。案の定、そこにはデカデカと和彦・・・いや、営業スマイルで武装したKAZUの顔のアップが載っていた。こんなもんを見てキヤーキヤー言う女心は武上には一ミクロンたりとも分らないのだが、まあ今はいい。一体この雑誌に何が書かれているというのか。

武上が和彦の顔の下に書かれた文字に目を移したその時、食堂の一角から「キヤー」「イヤー」という悲鳴が上がり、続いて「おー！」という歓声が上がった。見ると、テレビが置かれている周辺でその騒ぎが起こっているようである。

武上は雑誌を見るのを一時中断し、和田と顔を見合わせた後、動こうとしない鳥居を置いてテレビの方に向かった。既にそこには人垣ができており、みんな壁に掛けられたテレビを見上げている。

「どうしたんですか？何か大きな事件でもあつたんですか？」

テレビの前の席にずっと座って食事をしていたベテラン刑事に武上が訊ねると、ベテラン刑事は苦笑いをした。

「まあ、大きな事件と言えば大きな事件だな。ただし俺達の出る幕はない」

「え？」

「ほら、見てみ」

指を差されてテレビを見ると、武上の手の中にある雑誌の表紙と同じ笑顔がそこにあった。本性を知らなければ確かに爽やかな笑顔に見えるが、武上にはもう悪魔の微笑みにしか見えない。

その悪魔の微笑みに大きなテロップが重なる。

「え？結婚？」

和田が武上より早く、そのテロップの意味を認識し、文字をそのまま声に出した。

武上も一歩遅れて、ようやくその意味を理解する。

「・・・結婚？え、結婚、って結婚？和彦が！？」

またテレビの周辺から「ヤダー」と女性達の悲鳴が上がる。しかしもう武上の耳にその悲鳴は届かない。

いや、和彦が結婚しようとしまいと、武上には関係ない。だが、問題は和彦の結婚相手だ。

まさか、寿々菜さん！？

ま、待て。寿々菜さんはまだ高校生だ。でも、和彦はそんなこと気

にする奴じゃないし・・・  
もしかして「できちゃった婚」とか・・・

「まさか！！！寿々菜さんに限ってそんなこと！！！」

和田がため息をつく。

「武上さんて面白いですよ。何を考えてるかすぐ分かります。あ、ほら、容疑者の情報が出ましたよ」

「寿々菜さんを容疑者って言うな！」

「まだスウが容疑者と決まったわけじゃないでしょう」

完全な職業病だが今はそれどころではないのでスルーしておこう。  
とにかく容疑者（結婚相手のことだ）の情報収集が最優先だ。

武上と和田は穴が開くほどテレビを見つめた。  
そこには新たなテロップでこう書かれていた。

『ホテルマンが暴露、KAZUが結婚式の予約に来た！お相手は一般女性！！！！』

「・・・」

武上は判断に困った。寿々菜は一応和彦と同じ事務所に所属している「スウ」という芸名の芸能人だ。しかし「一応」も「一応」で、ほとんど一般人と言ってもいいくらいである。この「一般女性」が寿々菜かどうかは微妙なところだ。

「あ、でも、スウじゃないみたいです。ほら、モザイクの写真が

出てます」

なるほど、確かに和田の言う通り、堂々と腕を組んで高級ホテルの正面玄関から出てくるカップルの写真がテレビに映されている。男の方はサングラス姿とは言え間違いないと和彦だ。女性の顔にはモザイクがかかっているのだが・・・

「スウはあんなにスタイル良くないですからねー」  
「・・・」

寿々菜の為に反論してやりたいところだが、悲しいかな武上といえども反論の余地はない。

和彦の横に映っている女性は抜群のスタイルだ。顔は見えないがおそらく美人に違いない。

一方、寿々菜は・・・。。。。。。

「でも僕はスウの方がタイプですね。顔も体型も愛嬌があるって言うか」

「和田！」

と、武上は口で怒りながらも、心の中では和田に激しく同意していた。

そうだ。寿々菜さんには寿々菜さんの良さがあるんだ。  
あんな女、目じゃないぞ。

世の男性の何割が武上と和田に同調してくれるかは怪しいところだが、取り敢えず和彦の結婚相手が寿々菜ではないことが分かったの



で、武上は胸を撫で下ろした。  
と同時に、改めて驚きが込み上げてくる。

「和彦が結婚か……。本当か？何かの間違いじゃないのか？」

「でもホテルマンが、KAZUが結婚式の予約に来たって言ってるんですよ？他の人の結婚式の予約なんかしないだろうし、間違いないでしょう」

「でもあいつまだ21歳だぞ」

「しかもこの人気絶頂期に結婚だなんて、よく事務所が許しましたよね」

「・・・あ」

武上はここに来てようやくある2人の顔を思い出した。

三十路男ながらに和彦に恋するマネージャー・山崎と・・・どこまでも金にうるさい事務所の所長・門野の顔である。

## 第2話 失意の寿々菜

白木寿々菜、16歳。

身長160センチ、体重 キロ。

クリンとしたボブと少し目尻の下がった瞳が、その愛嬌の良さとお人好しさ・・・もとい、人柄の良さを表している。

しかし常にお気楽ご気楽・・・再びもとい、前向きな寿々菜とも言えども、今回ばかりはショックが大き過ぎた。

学校で友達から見せられた週刊誌の中の、和彦の結婚報道。KAZUファンが高じて芸能界入りした寿々菜にとっては、これから自分が進むべき道が突然断たれた様な気分である。もちろん、純粋な失恋という痛手もそれに加わる。

和彦さん、結婚するだなんて一言も言っただけなのに・・・

寿々菜が重い重い足取りで学校の門をくぐると、そこに見慣れた人影が立っていた。

武上である。

勤務中なのか、武上の後ろに止まっている車は寿々菜も何度か乗ったことのある覆面パトカーだ。助手席に見える人影は武上の先輩兼パートナーの三山刑事に違いない。

もちろん刑事が勤務中に油を売るなど言語道断なのだが、そこは優しい三山、武上の「恋」を影ながら応援してくれている。

「寿々菜さん！」

「武上さん・・・どうしたんですか？」

いつもの笑顔も作れず、寿々菜は無表情のまま武上に歩み寄った。

「お仕事ですか？」

「いえ。ちよつと寿々菜さんのことが心配で。・・・大丈夫ですか？」

どう見ても大丈夫そうではないが、そう訊ねるしかない。

武上は、覚悟はしていたが、ショックを受けている寿々菜にショックを受けた。

「武上さんも知ってるんですか？和彦さんの結婚のこと」

「昼間にテレビで見ました。雑誌でも」

「そうですか・・・私も雑誌で見ました。顔は映されてなかったけど、綺麗な感じの人ですね」

「寿々菜さん・・・」

いつになく僻<sup>ひが</sup>みつぱい寿々菜に、武上は更にショックを受けた。

あの天使のように純粋な寿々菜さんにここまで思い詰めさせるなんて・・・

和彦、お前酷い奴だな。

武上とて人間だ、強力なライバルがいなくなったことが嬉しくないでもない。和彦が自分を慕っている寿々菜に手を出さなかったことから分かるように、和彦は和彦なりに寿々菜を大切にしていた。いつかそれが恋心になる日があるのではないかと、ヒヤヒヤした

こともある。

しかし武上が望んでいたのはこんな勝利ではない。同じ条件の元で寿々菜が和彦ではなく武上を選んでこそ、本当の勝利だ。

これじゃ、勝ち逃げと同じじゃないか。

武上は心の中でひとしきり和彦に文句を言ってみたものの、もちろん本人に聞こえるはずもなく。  
やはり（？）文句は面と向かって言わなくてはならない。

だがその前に、今日の前で沈みかけている沈黙の艦隊の救出が先である。

「す、寿々菜さん！その・・・あの、和彦はなんて言ってるんですか？」

寿々菜は力なく首を左右に振った。どうやらまだ和彦とは直接話していないらしい。

好きな女が失恋して落ち込んでいる。これ以上ないチャンスだ。しかし、その心の隙につけるには、武上は少々優しすぎた。

「じゃあまだ、あの報道が本当かどうか分からないじゃないですか！もしかしたら、とんでもない勘違いかもしれませんし！」

「はい・・・」

「あ、事務所はどうです？門野社長や山崎さんはどう言ってます？」

寿々菜はまた首を横に振った。だが今度は先ほどとは意味が違うよ

うだ。

「2人とも全く何も知らないみたいです。社長はカンカンだし、山崎さんはパニックしてました。和彦さんは携帯の電源を切ってて、捕まらないそうです」

やっぱり。

武上は心の中で頷いた。事務所に話しても反対されるのは目に見えている。和彦なら入籍するまで周囲に隠すことくらいは平気でやりそうだ。

つまり・・・和彦は本気で結婚するつもりってことか。

寿々菜には申し訳ないが、武上はそう結論付けた。しかしやはり寿々菜に正直にそうとは伝えられない武上である。

「寿々菜さん！本人に聞くまでまだ分かりませんよ！とにかく一度、事務所に行きましょう」

「え？一緒に行ってくれるんですか？」

「・・・」

武上は詰まった。「事務所に行きましょう」は「一緒に行きましょう」という意味で言ったのではない。武上は勤務中である。

だが、単なる疑問形ではなく期待の籠った寿々菜の口調に武上が逆らえるはずもなく。

というか、積極的に受け入れたいくらいだ。

武上は拝むような目で後ろに止まっている覆面パトカーを見た。  
助手席で三山がため息をついたのは言うまでもない。

寿々菜と「特別離業中」の武上が、和彦と寿々菜の所属する門野プロダクションに着いたのはそれから小一時間後のことだった、が、そこはまさに戦場。寿々菜はその光景に目を丸くした。

「すごい・・・」

「みんな暇だな」

「みんな」も仕事をサボっている武上に言われたくないだろうが、武上がそう言うのも無理はない。門野プロダクションが入っているビルの前には報道陣と悲壮な面持ちの女性ファン達が、大挙して押し寄せてきていたのだ。ザッと見積もってもその数は有に200を越えるだろう。

ちなみに、その群集の真後ろにいる「スウ」こと寿々菜に誰も気付かないのは、みんなKAZUの結婚報道に夢中だからではなく、スウの知名度の問題である。

「どうしよう・・・入れそうにありませんね」

寿々菜ががっかりしたように肩を落とす。

「いや、寿々菜さんは事務所の人間だから・・・ちょっと、すみません！」

武上は寿々菜の前に立ち、肩で群集を掻き分けて行った。事件現場

だと思えば大したことはない・・・こともない。

くそっ！たかが芸能人の結婚で、よくみんなここまで熱くなれるな！

武上と寿々菜はもみくちやにされながら1番前の列に辿り着き、プロダクションの警備員に「誰だっけ？」と首を傾げられるというオマケつきでなんとかビルの中に入ることができた。

「はあ！バーゲンみたいですね！」

「そ、そうですね」

武上はさすがに疲労困憊の態である。しかしここで立ち止まっている場合ではない。

2人はそれぞれ自分の中で気合を入れ直すと、エレベーターに向かって歩き出した。

「スウ！」

2人が振り向くとそこには、知らない人が見たら門野プロ所属の芸能人だと勘違いしてもおかしくない眼鏡にスーツのなかなかパリッとした男が立っていた。和彦のマネージャー、山崎だ。

「何しに来たんだ？仕事なんかないだろう」

「・・・」

和彦に密かに（？）想いを寄せる者同士犬猿の仲の2人、だが今は色んな意味で被害者同士でもある。

寿々菜は勝手に一時休戦を決めた。

「山崎さん！こんなところで何やってるんですか！？和彦さんは！？」

「昨日の夜に今日発売の雑誌の情報が流れてからずっと対応に追われてたんだ。ちょっと小休止だ」

山崎は右手に持ったコンビニの袋を軽く持ち上げた。久々の食事なのだろう、敏腕マネージャーの山崎の顔にもさすがに疲れの色が見える。

「和彦さんはまだ捕まらない。どこかに隠れてるんだろっな」

「そうですか・・・あの、社長は？」

「相変わらずカンカンだ」

「・・・・・・」

寿々菜と武上は視線を合わせた。

「全く、和彦さんは！勝手に結婚だなんて何を考えているんだか・・・」

山崎は一瞬ガツカリしたような表情になったが、すぐにマネージャーの顔に戻り、決然としてエレベーターに乗り込んだ。

寿々菜と武上也慌ててその後を追う。

「てことは、やっぱり和彦さんは本当に結婚するんですか？」

「ああ。和彦さん本人とは話せてないが、和彦さんが撮られたホテルに確認を取った。間違いなく和彦さんと女性が自分達の結婚式の予約をしていたそうだ」



寿々菜はため息をつきながら、最後の可能性に賭けた。

「和彦さんのそっくりさん、ってことは・・・」

「そんな人間がいるなら、スカウトしたいね」

山崎がそう言つてエレベーターを下り、事務所の扉を開いた、その時。

「よう、山崎、遅いじゃねーか」

聞きなれた声に3人は固まった。  
探し求めていた人物が事務所の中の机に腰をかけ、ニヤニヤ笑つていたのである。

### 第3話 A子

「和彦さん！」

「和彦！」

寿々菜・山崎、武上が同時に叫ぶと、和彦は更にニヤニヤしたが、その後ろには和彦とは対照的に苦虫を噛み潰したようなダルマ・・・じゃなかった、門野社長が立っている。

武上が和彦に詰め寄る。

「和彦！今までどこにいたんだ！？」

「家」

「家！？でも、携帯に出ないって・・・」

「あー？電源切ったままだったかな」

「この大騒動を知らなかったのか！？」

和彦の笑顔が変わる。笑顔には違いないが、どこか達観したような笑顔だ。

「知ってるさ。だからどうせ仕事にならないだろうと思って、家で  
のんびりしてた。いやー、人気者は困るね」

「お前な・・・寿々菜さんがどれだけ心配したと思って、」

「心配？何を心配するんだよ？」

和彦は武上の肩越しに寿々菜を見た。

ドキッとした寿々菜の顔から、和彦を見つけた驚きの表情が消える。

「よお、寿々菜。何してるんだ？仕事か？珍しいな」

「い、いえ・・・あの、和彦さん」  
「ん？」

和彦が「なんだよ」というように首を傾げる。特段変わった様子はない。

いつもの和彦さんだ・・・。

きつとあの報道はデマだったんだわ。だから和彦さんもいつも通りなんだ。

そうよね、いくらなんでも本当に結婚するなら、こんなんびりと構えてないわよね。

寿々菜がそう納得して口を開こうとすると、それより先に和彦が寿々菜に話しかけた。

「あ、もしかして俺の結婚について聞きたいのか？」

「はい！あれってやつぱりデマ、」

「ちよつと急なんだけど、来月の10日に入籍して式も挙げるから。寿々菜も来るか？」

寿々菜が固まる。武上も山崎も同様だ。

1人表情を変えなかったのは門野だが、渋い表情のままということ。は既に和彦と話し合ったからなのだろう。

「え・・・結婚、するんですか？本当に？」

「ああ。雑誌に載ってたろ？あのホテルマンがリークしてくれたお陰でな」

そう言いつつ、和彦は怒っている様子ではない。  
幸せな事なので、そんな些細なことは気にならないのか。

覚悟はしていたが、やはり本人の口から聞くと寿々菜は激しく動揺し、口を噤んだ。

代わりというわけでもないが、門野が口を開く。

「山崎」

「は、はい」

寿々菜と同じく呆然としていた山崎が門野社長の声で我に返る。

「和彦のワガママは今に始まったことじゃない。こいつは言い出したら絶対聞かない奴だ」

「はい・・・」

「世間にももうバレてる。ここは下手に逃げ隠れするより、堂々と発表しよう」

「・・・では、社長は和彦さんの結婚を認めるんですか？」

「認めなくても、こいつは勝手に結婚するだろ」

もちろんそれは和彦の性格に寄るところもあるが、結婚くらいでは人気は揺るがないという自信のなせる技だろう。

そして実際、もし勝手に結婚して門野プロダクションをクビになったとしても、和彦を欲しがっている事務所はたくさんある。

結局、人気のある者が強い世界だ。

「和彦。これは明らかに契約違反だ。給料を減らさせてもらっぞ」

「有料で記者会見開いたりインタビュー取ったりして俺の結婚で儲けるつもりのくせに、更に減給か。ケチだな」

「当然だ。山崎、記者会見の準備をしとけ」  
「はい」

寿々菜は少し山崎に同情した。

山崎も男とはいえ寿々菜と同じように和彦に思いを寄せる者だ、今回のことがショックでない訳がない。それなのにマネージャーという立場上、社長には逆らえないし和彦の為になることなら例え自分の意思に反することでもやらなくてはならない。

それに引き換え寿々菜は・・・ただただ落ち込むことができる。

「寿々菜さん・・・元気出してください」

武上にそう言われて頷く寿々菜だが、さすがにいつもの元気は出ない。

なんと言っても結婚だ。ただのお付き合いとは訳が違う。

それにしても、いつの間に結婚を考えるほど真剣に女性と付き合い合っていたのだろうか。

「和彦、記者会見にはA子も連れて来い」

そう言う門野に和彦が「は？」という顔をする。

さすがの和彦も一般人の婚約者をカメラの前に出すのは気が引けるらしい・・・のかと思ったら。

「A子って誰だよ？」

「一般人の女は全部A子と決まってる」

「・・・まあなんでもいいけど。分かった連れてくるよ」

「いいのか？」

自分で言っておいて驚く門野。だいたい何事においても門野には楯突く和彦が、こうも簡単に自分の要求を飲むとは思わなかったのだ。しかも一般人の婚約者をテレビに出しても良いと言っているのだから、これはもう天変地異と言っていいだろう。

やっぱり本気なんだ、和彦さん。

だから自分の奥さんになる人をテレビに出しても平気なんだ。

「和彦さん・・・」

「・・・なんだよ寿々菜。泣くなよ」

和彦も寿々菜が自分に好意を寄せているのは百も二百も承知。さすがに少し申し訳なさそうな表情になる。

一方寿々菜は、涙ぐみながらも健気に笑顔を作った。

「私は和彦さんの幸せを願っています」

「寿々菜・・・」

「栄子さんとお幸せに!」

寿々菜は涙を拭き拭きクルリと反転し、和彦に背を向けた。

「は？栄子？A子の間違い、」

「お幸せに!」

スカートの裾を翻し事務所から走り出していく寿々菜を「だから栄子じゃないって!」という和彦の声が追いかけてきたのだった・・・。

「寿々菜さん・・・あの、大丈夫ですか？」

「・・・」

事務所の近くの公園のベンチで、まだ黄昏時でもないのに1人黄昏ている寿々菜に、武上は話しかけた。だがダメージは相当なものらしく、寿々菜は無言のままだ。

「あ、これ、食べませんか？さつき公園の入り口で買ったんですけど」

武上が差し出したのはホクホクと美味しそうな焼き芋だった。

寿々菜はチラリとそれを見て「今は食欲なんて・・・」と言いながらしっかりと焼き芋を受け取り、頬張った。

「ありがとうございます」

「いえ」

取り敢えず、食べ物が喉を通らない、というような状態ではないことが分かって武上はホツとし、寿々菜の隣に腰を下ろした。（そもそも寿々菜の喉を食べ物が通らないなんてことがあるとは思えないが）

「和彦さん、本当に結婚するんですね」

「・・・そうですね」

「栄子さん、どんな人なんでしょうか・・・」

ここで「いえ、A子です」と訂正できないのが武上。ちゃんと寿々菜に合わせてやる。

「和彦から聞きましたが、栄子さんは年上の女性だそうですよ」  
「年上・・・」

和彦より5つも6つも年下の寿々菜にはとても勝ち目はないようだ。

「明日の夕方、早速記者会見をするそうです。寿々菜さんも行きま  
すか？土曜ですし」

「寿々菜さんも、って・・・武上さん、行くんですか？」

「はい。さつき門野さんに『記者会見の間、和彦のボディガードを  
やってほしい』と頼まれたので。ちょうど非番ですし、行くつもり  
です」

正確には門野は「嫉妬深いファンが記者会見場に紛れ込んで、和彦  
やA子に危害を加えないとも限らないから和彦とA子のボディガ  
ードをやってほしい」と言ったのだが、寿々菜もファンという部類  
に入る以上、寿々菜にそのまま門野の言葉は伝えられない。

もつとも武上に見れば、和彦が誰かに危害を加えられても一向  
に気にならないが、やはり刑事として一般人女性・A子は守らな  
くはと思う。

それに・・・まあ、めでたい事だからな。

今回くらいは和彦に協力してやってもいいだろう。

落ち込んでいる寿々菜には申し訳ないが、武上はそう思った。





## 第4話 記者会見

ホテルの大広間を借りての記者会見は、盛大な物だった。

何十ものカメラに百人を軽く超える取材陣。そしてそれと同じ位いるのが警備会社の人間だ。だが警備会社の人間はいわばカモフラージュのような物で、いざ和彦と婚約者が狙われた時に二人の前に飛び出すのは、マネージャーのような顔をして和彦の右隣に立っている武上の役目である。

くそつ。こんなの俺の仕事じゃないのに！

武上は会場中に視線を張り巡らせながら、司会をしているフリーアナウンサーの奥を見た。そこには開かれたままの扉があり、その奥は事務所関係者の控え室になっている。寿々菜と山崎、それに門野もそこで和彦の言葉に耳をそばだてているはずだ。

今度は高砂のように高い場所にあつらえられた壇上でスポットライトとカメラのフラッシュを浴びながら営業スマイル全開の和彦、いや、KAZUに目をやる。

武上もいい加減和彦の二重人格(?)には慣れているが、今日の笑顔は特別に見える。なんだか本当に心から笑っているようなのだ。そして和彦にそんな顔をさせているのが・・・

そう、和彦の左隣に座っているスラッとした美女である。

間違いない雑誌やテレビで顔をモザイク処理されていた女性・A子だ。武上も顔は今日初めて見たのだが、同一人物だと断言できる。あんなにスタイルの良い女性はそうそういないだろう。

スタイルだけではない。顔もスタイルを裏切っていない。

「それでは、KAZUさんとご婚約者様のご婚約会見を開かせて頂きます」

アナウンサーが嫌味なくらいよどみなく原稿を読み上げていく。ちなみに原稿は全て門野の都合のいいように、つまりKAZUのイメージを損なわないように作られている。

「なお、ご婚約者様は一般の方でいらっしゃいますので、お写真は普通に撮って頂いて結構ですが、名前は仮名で栄子さんとさせて頂きます」

・・・門野さん、原稿の内容を考えるのでいっぱいいっぱい、適当な仮名にしたな・・・？

武上は呆れたが、当の「栄子」はそんなことは全く気にしていない様子で、綺麗な栗色の巻髪を揺らしながら優雅に微笑んでいる。

一方の和彦もさすがに見た目は誰にも引けを取らない。悔しいが武上もお似合いだと言う他ない。

もつとも、そんなこと口が裂けても寿々菜の前では言えないが・・・

武上は寿々菜が心配になり、もう一度控え室へ目をやった。

その頃寿々菜は控え室の中から記者会見場の様子を見ていた。幸せそうな和彦と栄子。とてもじゃないが寿々菜などが入り込む余地はない。

しかし寿々菜は違和感を覚えていた。

寿々菜はご存知の通り、思い込みが激しく全てにおいて「鈍い」女の子だが、この違和感だけは推理が得意な和彦と刑事である武上のお墨付きだ。寿々菜が違和感を感じるところに、必ず何かおかしい事がある。

和彦は、寿々菜から見ても本当に幸せそうに見える。

だが・・・栄子の方は違う。

確かに幸せそうに和彦と微笑んでいるが、どこかぎこちない。一般人なのにいきなりこんな記者会見場に引っ張り出されて緊張しているのかもしれないが、それにしてもあまり「幸せオーラ全開！」という感じではない。

KAZUファンの人に気を使って、控えめにしてるだけなのかな。

なんかそれもちよつと違う気がするなあ・・・

私だったら、和彦さんと婚約記者会見なんかしたら、空の上まで飛んでいきそうなくらい幸せなのに。

寿々菜は、栄子がカメラマンの隙を見て小さくため息をついたのを見逃さなかった。

「はあー、終わった終わったー。疲れたなー」

門野が危惧していたようなことは起こらず、記者会見は無事に終了した。そして今ちようど和彦と栄子が控え室にさがってきたのだが、

その瞬間和彦の顔からK A Z Uスマイルが消え、いつもの人を小馬鹿にしたような表情に戻る。

それを見ても栄子が全く動揺しないところを見ると、和彦は栄子には本性を見せているらしい。

夫婦になるのだから当然と言えば当然なのだが、武上は少し驚き、寿々菜と山崎はショックを受けた。和彦は普段、ファンにはもちろん、大抵の人に対してK A Z Uモードを崩さないのだ。

「まあ、良かったんじゃないか」

1人満足そうなのは、自分の思い通りの記者会見にできた門野だけである。

「それにしても子供の頃からの知り合いと結婚とはな。下手にデキ婚なんかするより、ずっといい。場合によっちゃ『K A Z Uは一途だ』なんてイメージアップにもなるぞ」

「そりゃどーも」

和彦が適当に相槌を打つ。

「よくできた嘘だ」

ところが門野がそう言つと、和彦は少しムツとしたように言い返してきた。

「嘘じゃない。本当に子供の頃からの知り合いなんだよ。な？」

和彦が栄子を見ると、栄子は少し照れくさそうに頷いた。

「はい」

寿々菜は、記者会見でも栄子が少し話したのを聞いていたが、改めて栄子の声を聞くと声まで「美しい」のが良く分かる。美人というものは、どこをどう取っても美人なようだ。

「まあ、ずっと密かに付き合ってたっていうのは嘘だけだな」  
「それなのにどうして急に結婚する事にしたんだ？」

武上が訊ねると、和彦はちょっと得意そうにこう言った。

「何年かぶりに再会する機会があつて、その時にピピッと来たんだよ」

「・・・芸能人にありがちな『ピピツ』か。そんなんで結婚して大丈夫なのか？」

「俺達は大丈夫」

和彦は自信満々に栄子の肩を抱いた。それがまたドラマのワンシーンのように絵になるのだから美男美女は得である。

「和彦さん、のんびりしている場合じゃありませんよ。昨日、今日とほとんど本来の仕事ができてませんから、今から早速仕事です」

山崎が淡々と言う。が、その視線は和彦の手が置かれた栄子の肩の上だ。

「へえへえ、分かってるよ。じゃあまた後でな。夜、式を挙げるホテルに行つてウエディングプランナーと段取りを話そう」

和彦はそう言うとき突然、栄子の唇にチュツと音を立ててキスをした。栄子は一瞬ギョツとしたような表情をしたが、他の人たちは驚きの

あまりそれには気づかなかった。

「・・・うん、後でね」

唇が離れたあと栄子がそう言ったのを聞いて、和彦は満足そうに山崎と控え室を出て行った。

地下鉄の中、なんとなく一緒に帰る形になってしまった寿々菜と武上とそして栄子は、3人並んで椅子に座っていた。武上は本当は真ん中に座って寿々菜と栄子の接触を避けたかったが、女2人と男1人では、男はどうしてだか端っこに座ってしまう。武上のような男は余計にだ。

「あの・・・ご婚約、おめでとうございます」

寿々菜はずっと黙っているのも変だと思い、頑張って栄子に話しかけた。

「ありがとう」

栄子がバラのような笑顔で微笑む。だが、やはりどこか寂しそうな影が付き纏う。

そんな栄子の様子に、寿々菜がそれ以上何を言っているかわからないと、今度は栄子の方が寿々菜に話しかけてきた。

「あなた、スウちゃんという子よね？」

「え？私のこと、知ってるんですか？」

スウのことを知っているなんて、なんとも貴重な人種である。  
しかし。

「ええ。和彦からよく聞いてるから」

なんだ・・・

寿々菜は少しがっかりした。

「和彦さん、私のことなんて言っていましたか？」

「おっちょこちょいで手のかかる奴だって」

「・・・」

「でも、それが和彦の愛情表現なのよ。和彦はスウちゃんのことをとても大切に思っているみたい」

「大切に思っている」。だがそれはあくまで「妹のように」だと寿々菜も分かっている。

ますます落ち込む寿々菜を見て、自分の知名度の低さに落ち込んでいると思った栄子は励ますようにこう言った。

「あ、だけど私、和彦にスウちゃんのこと聞く前からスウちゃんのこと知ってたわよ」

「え？」

「スウちゃん、前に『御園探偵』に出てたでしょ？とっても演技が上手だったから、印象に残ってたの」

「・・・ありがとうございます」



栄子は見た目だけでなく、中身まで「美人」だ。  
寿々菜はヤキモチばかり妬いている自分を情けなく思い、なんとか  
笑顔を作って栄子に向けた。

## 第5話 胸騒ぎ

「では、お式もご披露宴もシンプルな物でよろしいのですね？」

Tホテルのウエディングプランナー・小杉恵美は声が震えるのをなんとか堪えながらそう言った。

だが、この世界ではベテランである10年目の小杉が緊張するのも無理はない。なんといってもトップアイドルのKAZUが目の前に座っており、自分のプロデューサーで結婚式を挙げようというのだから！

小杉がKAZUの結婚式担当になったのは単なる偶然だった。

5日前、遅めの昼休みから戻ってきてブライダルサロンの中でパンフレットの整理をしていると、背の高いカップルがフラツと入ってきて「ここで結婚式を挙げたいんですが」と小杉に言ったのだ。

小杉は最初それがKAZUだと気づかなかったが――似ているなとは思ったが、まさか本当にKAZUだとは思わなかった――本人が「僕、芸能人なんですけどご迷惑にならないですかね？」と言ったのを聞いてようやく気がついた。

そしてそのまま小杉が2人にあれこれ説明したので、なんとなくそのまま小杉がKAZUの結婚式を担当することになったのだ。

小杉はいまだに信じられない気分だった。

ただ少し残念なのは、冒頭にもあったようにKAZUは質素な式を望んでいるということだ。

ホテルとしては豪華な式を挙げてもらったほうが儲かるし、ホテルの宣伝にもなる。小杉自身もそんな大きな結婚式を手がけてみたいと常々思っていた。しかし本人がそうしたくないのならば、仕方が

ない。

幸いホテルの総支配人は門野社長とは違って金の亡者ではない、お客様第一の根っからのサービスマンだ。小杉に「何が何でも豪華な式を挙げさせろ」なんてことは間違っても言わない。その点小杉は、がっかりしながらも安心して仕事を進められる。

「テレビカメラは披露宴に入れますか？」

それでも小杉は若干未練がましくそう聞いた。  
が、和彦はやはり「とんでもない」と首を横に振る。

「テレビカメラなんかあったら落ち着いて披露宴を楽しめないじゃないですか。絶対に入れません。だからこじんまりした会場がいいんです」

「かしこまりました」

KAZUの意志は硬いみたいね。

小杉は今度こそ「式の拡大」を諦めて、詳細の打ち合わせに入った。

「式はチャペルで行いますか？それとも神前式でしょうか？」

「チャペルで」

「ご出席は何名様くらいですか？」

「80人くらいかな」

「お花は生花にしますか、造花にしますか？」

「生花で」

ときばきと答えるKAZU。こういう客はやりやすい。

しかし・・・

小杉は新婦である栄子（と呼ばれていることを小杉は知らないが）の方を見た。

結婚式と言えば、普通あれこれ決めたがるのは女性の方である。ところがこのKAZUカップルは男であるKAZUの方が積極的で、女である栄子の方が消極的である。

もっと正直にいうと、栄子はこの結婚に乗り気ではないように見える。そこはこの道10年のベテランの小杉が言うのだから間違いない。

KAZUなんて有名人と結婚するから気後れしてるのかしら？

気後れなんてしないでいい容姿をしてるのに。

それとも単なるマリッジブルー？

あ、まさか・・・

「あの、間違っていたら大変申し訳ないのですが」

「はい？」

「新婦様はご妊娠されていたりしますか？」

栄子が驚いた顔をし、KAZUが笑う。

「いえ、してません」

「そ、それは失礼しました」

なんだ、ツワリで気分が悪いのかと思った。

でも、それじゃあ元気なさそうに見えるのはやっぱり・・・

いや、そこを盛り立てていくのがウエディングプランナーの仕事よ。

「それでは次にドレスとお食事の打ち合わせについてですが、こちらら別途時間を取って頂いて・・・」

と、その時、ブライダルサロンの入り口に人影が見えた。

小杉はすぐにそれに気づいたが、KAZUカップルは入り口に背を向けているので気づいていない。

そこで小杉も無視しようとしたのだが・・・

「ああ、これはこれは。KAZUさんではありませんか」

背広がはちきれそうなくらい肥満体系の脂ぎった男が、人目もはばからず大きな声で近づいてきた。総務のボス・倉屋小次郎である。

ちなみにこのホテルの従業員はみんな、倉屋のことを「小次郎さん」と呼んでいる。これは別に小次郎を慕っているからでも、大きな身体のくせに「小次郎」なんてふざけた名前であることを馬鹿にしているからでもなく、実は小次郎の兄・宗太郎がこのホテルの総支配人で、2人とも苗字が同じでややこしいから、宗太郎のことも小次郎のことも名前で呼んでいるだけなのである。

もともと「宗太郎さん」はみんな親しみを込めて呼んでいるが、「小次郎さん」には軽蔑の響きが含まれているのも事実。

というのもこの小次郎、とにかく「いけてない」人間で、ろくに仕事もせずギャンブルと女ばかりの不健康な生活を送っているのだ。「総務のボス」なんて何をやっているのかよく分からない立場も、兄の宗太郎が温情で与えてやった物である。

小杉は密かに、マスコミにKAZUの結婚をリークしたのは小次郎ではないかと睨んでいる。

何故小次郎がそんなことをするのかって？

それはもちろん、雑誌社から貰える小遣い目当てである。

「この度は当ホテルでの挙式、ありがとうございます」

この度はおめでとございます、が先でしょ！と小杉は心の中で小次郎に突っ込んだ。

「いえ、当日はよろしく願います」

しかしKAZUはそんなことは気にもせず、小次郎にも笑顔を送る。

やっぱりKAZUはテレビの外でもKAZUなんだわ。素敵。

と、武上が聞いたらひっくり返りそうなことを考える小杉。

だが今はとにかく小次郎に邪魔をして欲しくない。

小次郎がいたのでは、まとまる話もまとまらなくなる。

「小次郎さん、そう言えばさっき宗太郎さんがお探でしたよ」

口からでまかせを言ってみる。だが兄に頭の上がない小次郎は口の中で「チッ」と舌打ちすると、「では失礼します」と言ってブライダルサロンから出ていった。

小杉はホッとため息をつき、KAZUカップルに頭を下げた。

「失礼いたしました」

「いえ。宗太郎さんって誰ですか？」

「うちの総支配人です。さっきの小次郎さんの兄なんですが・・・」

兄弟なのに月とすつぽんほども違うんです」

そう言つて小杉はポツと頬を染めた。

宗太郎は今年50歳になる。しかし実年齢より遥かに老けて見える小次郎とは違つて、宗太郎は若々しくかつこいい。12年前に妻を亡くしてからずっと独身で、ホテルウーマン達の密かな憧れなのだ。

「小杉さん、その宗太郎さんという方がお好きなんですね」

不意に栄子が口を開いた。

小杉は、まさかここで栄子が話しかけてくるとは思つていなかった。ので動揺し、それで返つて思つていることが顔に出てしまった。

「そ、そんな、とんでもない……。総支配人ですよ？」

「総支配人でもなんでもいいじゃないですか」

「でも……。近くで仕事ができるだけで充分です」

小杉がそう言つと、栄子はふと表情を曇らせた。

「そう……。かもしれませぬね。好きな人の近くにいれるって、素敵なことですよ」

栄子のその言い方が妙に実感がこもっていて、小杉は胸騒ぎを覚えた。

## 第6話 兄弟

「先程うちの従業員が失礼なことを致したと伺いました。大変申し訳ありません」

そう言つて和彦と栄子に潔く頭を下げたのは、中肉中背のなかなか見栄えのいい男だった。

年は40半ば・・・いや、彼が小杉の言っていた総支配人の倉屋宗太郎だから、50歳か。

確かに、見える男だな。

和彦は心の中で宗太郎を値踏みしながら顔には爽やかな笑顔を作り「大丈夫ですよ」と言つてはみたものの、実はかなり怒っていた。もしここに武上がいたら、間違いなく八つ当たりしていただろう。

「しかし、小次・・・倉屋の大きな声のせいで、岩城様のことに気付かれたお客様がお連れ様にとんでもないことを」

宗太郎が申し訳なさそうに栄子を見た。

そうなのだ。小次郎のせいで和彦たちに気付いた一般客達によって、和彦はともかく栄子まで勝手に写真を撮られまくる始末。拳句、たまたま居合わせたKAZUファンが栄子に水をかけるといっておまけまでついてきた。

「少ししか濡れてませんから」



栄子もそう言ったが、実際にはかなり服が濡れてしまっていた。小杉が真っ青になって宗太郎を呼んだのは仕方のないことだ。

「お式の前ですから、お風邪を引かれては大変です。本日はお詫びも兼ねて部屋をご用意させて頂きます。お召し物はクリーニング致しますので、部屋でガウンにお着替えください」

「はあ・・・部屋ですか」

「もちろんサービスでございます。ごゆっくりご宿泊なさって下さい」

和彦と栄子は顔を見合わせた。サービス（つまり無料）ということに反応したのでは、無論ない。

2人が顔を見合わせた理由は「ご宿泊」の方だ。

和彦は「いや、そこまでして頂かなくても」と断ろうとしたが、濡れた栄子をそのまま家に帰すわけにもいかない。クリーニングの間だけでも部屋を借りた方がいいだろう。

「じゃあ、お言葉に甘えて」

「どうぞ、こちらです」

総支配人である倉屋宗太郎自ら和彦たちを案内する。

そして和彦と栄子の後ろを小杉が歩く。

「本当に申し訳ありませんでした・・・」

小杉は意気消沈している。無理もない、自分の目の前で客が水をかけられたのだ。しかもブライダルの打ち合わせ中。結婚式をキャンセルされてもおかしくない。

だが、和彦は怒ってはいたもののそんなことはおくびにも出さず、

結婚式のキャンセルもしなかった。

「小杉さんのせいじゃありませんよ」

栄子が小杉を励ます。

「怪我をしたわけでもないし、気になさらないで下さい」

「はい・・・でも・・・」

「それより、小杉さんのおっしゃる通り、宗太郎さんは素敵な方ですね」

栄子にそう言われて、また小杉の頬が染まる。

「さっきの小次郎さんとは随分雰囲気違いますね」

「ですよね！」

思わず栄子が客だということを忘れて興奮する小杉。

宗太郎に聞こえないように栄子にこそつと話す。

「腹違いの兄弟、とかじゃないんですよ？正真正銘本物の兄弟。でも昔から宗太郎さんは何をやらせてもトップだったのに対して、小次郎さんはパツとしなかったそうです」

「あら、そうなんですか」

「今も宗太郎さんの手腕のお陰でTホテルが繁盛しているのが気に食わないらしくて・・・あの、もしかしたらなんですけど、マスコミに岩城様のご結婚のことをリークしたのも小次郎さんかもしれない」

「どうしてそんなことを？」

「余計なことをしたがるんですよ、あの人は」

小杉は当たり前のようにそう言った。

用意されたスイートルームから宗太郎と小杉が出て行くと、和彦はデんと2つ並んだ巨大なベッドに寝転んだ。栄子には、言葉は発せずとも和彦が素に戻っているのがすぐに分かる。

「結婚式の打ち合わせって疲れるなー。まあ、スイートがくつついて来たからいいけど。ラッキー」

「スイートなんて、仕事で泊まる時はいつもなんじゃないの？」

「うちのタヌキがそんな無駄遣いする訳ねーだろ」

門野社長のことである。

「でもホテル代を払うのはテレビ局とかでしょ？」

「タヌキは『普通の部屋でいいから、浮いた金はギャンブルに入れる』つつつて、ギャンブルが増えた分は自分の懐に入れるんだよ」

「本当にケチなのね、あのオッサン」

・・・おや。

どうやら仮面を被っていたのは和彦だけではないようである。

和彦が寝転がったまま「うーっん」と背伸びをした。

「それはそうと、やっぱりアイツは使えるな。俺の目に狂いはなかった」

「ほんと、さすが和彦ね。変なところで鼻が利く」

「うっさい。アイツを利用することを思いついたのはお前だろ」

「そうだったかしら？」

栄子が濡れたカーディガンを脱ぎながら涼しい顔をする。  
やはりこの女、どうも一癖あるらしい。

「ちょっと。何じつと見てるのよ。あっち向いてて」

「いいじゃん、婚約者なんだから」

ニヤニヤしながら栄子の着替えを見ている和彦に、栄子は脱いだカーディガンをバサツと投げつけ、ガウンを抱えてシャワールームに駆け込んでいった。

和彦はそんな栄子を見て、珍しく素で笑うと、ナイトテーブルの上に置かれた新聞を読み始めた。

そしてちょうど1面記事を読み終えた時、部屋の中に「ジリリリ」と控えめなベルの音が鳴り響いた。

ドアベルだ。誰かが来たらしい。

和彦が新聞を片手にドアを開くと、英兵を思わせる制服に身を包んだ若いベルボーイが1人、廊下に立っていた。

「失礼致します。濡れたお召し物を預かりに参りました」

若いあさがに一流ホテルのベルボーイだけあって礼儀正しい。  
ところが。

「ああ、ちょっと待って下さい。今着替えて・・・って、あいつ、遅いな。何やってるんだ」

和彦は無意識にシャワールームの方を見た。その扉はしっかり閉まっ  
つていて（和彦が推測するに、鍵もかけられている）まだ開きそう  
にない。

「すみません。まだ、」

和彦がベルボーイの方に向き直ると・・・ベルボーイは何やら思いつめた様子で栄子が入っているシャワールームの方を見つめている。

「あの！」

わざと大きな声で呼びかけると、ベルボーイがハッと我に返って姿勢を正す。

「し、失礼しました！」

「・・・」

・・・なんだ、コイツ。

なんとなく面白くない。

和彦はチラリとベルボーイを睨んだ後、大股でシャワールームに向かい、ドアをノックした。

「おい。ベルボーイが濡れた服取りにきたぞ」

「あ、うん。今出る」

ドアが内側から開き、柔らかそうな白いガウンに身を包んだ栄子が濡れた髪をバスタオルで拭きながら現れた。身体からはホコホコと湯気が立ち上がっていて、まるで映画で見る女優の風呂上りシーンのようだ。栄子をよく見慣れた和彦でも、思わず見とれてしまう。

・・・あ。まさかあいつ、また。

振り返ってベルボーイの方を見ると、案の定ベルボーイもポカーンと栄子に見とれている。

「ごめん、ごめん。ついでにシャワー浴びてたの。気持ちよかったわよ？和彦も後で入ったら？」

そう言いながら栄子は濡れた服を手に、ベルボーイに近づいた。ベルボーイが緊張しているのを知ってか知らずか、自分のガウン姿を恥らう様子は全くない。

「この服、よろしく。水で濡れてるだけだから、乾かすだけでいいわ」

「はははい。確かに受けたたままりました」

転がるようにして部屋を出て行くベルボーイを見て、栄子が楽しげに笑う。

「かわいい子ね」

「おい・・・からかうのもいい加減にしろよ」

「あら、もしかして妬いてるの？」

「まさか」

和彦が再びベッドに座って新聞を広げると、栄子は少し真面目な表情で和彦の隣に腰を下ろした。

「本当に泊まってく？」

「どっちでも」

「・・・ねえ、後悔してない？」

「何を？」

「この結婚」

和彦が新聞から顔を上げる。

「何を今更。第一この結婚を言い出したのは俺の方だぞ？」

「そうだけど・・・。ほら、ファンの人達はショック受けてるじゃない。スウちゃんっていう子も、和彦のこと好きみたいだし」

「そんなの仕方ないだろ。ファン全員と結婚なんてできない」

「人気者のお決まりの台詞ね」

栄子は笑って立ち上がると、ガウンの紐を解いた。

## 第7話 試着

「申し訳ありませんが、こちらは内科です。心療科は3階になります」

看護婦に素っ気無くそう言われて寿々菜は鼻をすすった。

「私もう生きていけません！」

「先生、精神科に行って頂きましょうか？」

「そうだね」

「そんなあゝ!!!」

「次の方、どうぞ」

看護婦は診察室の扉を開いて寿々菜に言った。

「お帰りはこちらです」

「ひどいー」

・・・そう、ここは言うまでもなく病院である。

ただ、寿々菜はどこが悪いわけではなく（敢えて言うなら頭が悪い）

、ひよんなことから知り合ったここに勤めるエリート医師・坂井と

看護婦の高井戸薫たかいどかあるに「お悩み相談」に来たのである。

全くもって迷惑な話だ。

KAZUファンの坂井さんと薫さんなら、私の気持ちを分かってくれると思ったのに！



ところが坂井は、

「まあファンと言っても僕は男だからね。KAZUが誰と結婚しようとなんかどうでもいいよ。僕はKAZUがドラマに出てればいいんだ」

という次第。一方、KAZUの為に脱・地味女を果たした薫は、

「そりゃあショックよ。でも私は本当にKAZUさんを好きだから、KAZUさんが幸せなら温かく見守るわ」

と、優等生なご回答。

薫さんてば前に、「KAZUさんの一ファンであることをやめたんです」とか言ってたくせに・・・

温かく見守るなんて絶対嘘よ。

薫さんみたいな人に限って、栄子さんにこっそり毒を注射したりするんだから。

和彦の結婚のせいで、若干荒れ気味の寿々菜である。

「でも！これはショックですよね！」

寿々菜はさつき駅で買ってきた週刊誌を薫に突きつけた。

そこには「KAZU 噂の婚約者と挙式を行うホテルに婚前お泊り！」という文字と共に、2人が朝日の中（に寿々菜には見える）並んでホテルから出てきている写真が掲載されている。

「これが何か？」

薫はじーっとそれを見た後、首を傾げた。

「結婚前なのに、こんなこといけませんよね！」

「・・・」

「ね！」

「おこちゃま」

「！！！」

「さ、お譲ちゃん、小児科は2階ですからね。1人で行けるかな？」  
「行けます！」

おいおい、行くのか。

こうして寿々菜は戦友を得ることなく、病院を後にしたのだった。

その頃、「噂の婚約者」である栄子は1人でTホテルを訪れていた。ここで結婚式の打ち合わせをする時は必ず和彦と一緒にだったが、今日はウエディングドレスの試着だけだし和彦もそうそう仕事を休めないという訳で、今日は1人である。

とうとうここまで来ちゃったな・・・

ズラリと並べられた純白のドレスを前に栄子は小さくため息をついた。

「どちらからご試着なさいますか？」

小杉が分厚いカタログを栄子の前に広げた。ハンガーに掛けられているドレスを見るより、カタログの中でモデルが着ているドレスを見る方がイメージが沸きやすいとかで、まずはカタログを見て試着

するドレスを決めるらしい。

「オーソドックスなA型もよろしいかと思いますが、新婦様は背が高くスタイルも良ろしいのでマーメイド型もお似合いだと思います」

「はあ・・・」

小杉お勧めのタイトなマーメイド型ドレスを着ている自分と、その右隣でタキシードを着ている和彦を想像してみる。  
確かに似合いだ。それこそまるでカタログから抜け出てきたように。

でも・・・

「こっちを着てみます」

栄子を選んだのは、腰から下が大きく広がったA型のウェディングドレスだった。大人っぽい栄子が着るには少々可愛らしすぎる、と小杉は思ったが、そこは客の好みだ。小杉は笑顔で「かしこまりました」と言つて、栄子が所望したドレスをハンガーから取ってきた。

「こちらのフィッティングルームをお使い下さい」

そう言つて小杉がカーテンを引いた奥には、フィッティングルームと呼ぶには広すぎる空間が広がっていた。奥の壁に取り付けられている鏡も、普通の大きさではない。

「うわあ、広い」

栄子が思わず感嘆の声を上げる。

「ウエディングドレスはかさ張りますから着替えるにはこれくらいの広さが必要なんです。上の階にこちらと似たタイプのドレスのご用意もありますので、取って参ります。お1人でお着替えになれますか？」

「あ、はい」

正直、ボリウムたつぷりのドレスを1人で着る自信などないのだが、いい大人が着替えを手伝ってもらうというのも気が引ける。栄子は何とかなるだろうと思い、1人で着替えることにした。

カーテンを閉じスカートのホックを外していると、カーテンの向こうから小杉の声が聞こえてきた。

「ヒールも持つてまいります。サイズはおいくつですか？」

「24センチです」

「ヒールの高さはどういたしましょう？岩城様は背がお高いので、何センチの物を履いても岩城様より高くなることはないと思います」

「えっと・・・いえ、あまり高くない物でお願いします」

「かしこまりました」

そこで小杉の声は途切れ、足音が遠ざかって行った。部屋から出て行ったらしい。

栄子はまたため息をつく、大きな鏡に映った自分の姿を見つめた。

一方小杉は栄子と話している時、フィッティングルームの前に綺麗に並べられた栄子の靴を見ていた。ヒールの高い靴だ。

小杉は、ヒールは背の高い女性が履いてこそ美しいと思っている。

栄子もそう思っているかどうかは分からないが、ヒールが嫌いではないらしい。

ウエディングドレスを着ると足元は見えないけど、ヒールの高い靴を履いた方が足がより長く見えていいのに・・・

小杉は釈然としないまま、部屋を後にした。

そして小杉がエレベーターの中に消えるのを待っていたかのように、1つの人影が部屋の中に滑り込んでいったのだった。

「おめでとう、結婚するらしいじゃない」

嫌味たつぷりに和彦に話しかけてきたのは、年齢不詳の女プロデューサー・Kである。

名前はまだない。

・・・じゃなくて、和彦は名前を思い出せなかった。が、顔を合わせる度に口説かれていたので好きな人間ではないということは覚えている。

和彦は「ええ、まあ」と生返事をした。

「お相手はどんな方？」

「一般ですよ」

「それは知ってるけど。業界人でもないの？仕事は？」

しつこいなー。うぜー。

和彦は台本を読む振りをして顔を伏せた。

今日は単発ドラマの撮影の為に東京を遠く離れた山奥に来ている。この仕事はだいぶ以前から決まっていたのでKはここでまた和彦を口説くつもりだったのだろうが、先日の和彦の結婚報道のお陰であり機嫌が良くないらしい。

和彦もプロデューサーを怒らせるのは得策でない事くらいは分かっているので、イライラしながらもなんとか笑顔で顔を上げた。

「業界人じゃないですけど、出版社に勤めています」

「へえ」。その関係で知り合ったの？」

てめーに関係ないだろ!!!

「いえ、昔からの知り合いなんです。再会したのは仕事の関係ですけど」

「へえ」

和彦は、早く休憩が終わって撮影が再開してくれないかな、などと今まで思ったこともないようなことを思った。

いつそ早く結婚しまえば、こいつにこんなネチネチ言われなくて済むのかもな。

・・・いや、それじゃこの結婚の意味がないか。

和彦がうんざりしながらKの嫌味を右から左に聞き流していると、和彦の携帯が鳴った。電話だ。和彦は渡りに船とばかりに携帯に出た。今なら武上からの電話でも、優しく応対できそうな気がする。

ところが。

和彦の耳に飛び込んできたのはとんでもない言葉だった。

## 第8話 消えた栄子

「武上！」

小杉から電話を受けた和彦がTホテルの一室に駆けつけた時、既にそこは警官と鑑識で溢れ返っていた。その中には武上の姿もある。

殺人事件担当である捜査一課の武上がここにいるということは・・・

和彦は武上の胸倉を掴む勢いで、武上に駆け寄った。

「なんだよ、これ！あいつは！？」

「落ち着け、和彦」

「これが落ち着いてられるかよ！！！」

和彦はそう怒鳴って部屋の中を指差した。

そこはブライダルサロンの隣にある、ウエディングドレスが展示されている部屋・・・の奥のフィッティングルームだった。

床も天井も血だらけだ。扉の向いにある大きな鏡には血の滝が流れ、壁に掛けられたウエディングドレスは真紅に染まっている。

1時間前、栄子が試着していたウエディングドレスだ。

武上は、今まで色んな事件に遭遇してきた和彦にだからこそ、ビジネスライクに事実だけを伝えた。

「ブライダル担当の小杉さんが見つけた時、部屋は既にこの状態だった。栄子さんはまだ見つかっていない」

「・・・え？」



和彦が啞然とする。

なんだかんだ和彦と付き合ってきた武上には、和彦が心の底から驚いているのがよく分かった。

「最初からこの状態だった？」

「そうだ。栄子さんの姿もなかった」

「・・・」

和彦はフィッティングルームの中をゆつくりと見回した。通常のフィッティングルームより広いと言ってもせいぜい4畳半くらいの大きさだ。すぐに全てを見て取れる。

「・・・ここで刺されたのか？」

「和彦・・・」

「あいつはここで刺されてどこかに連れて行かれたのか？」

「・・・」

今のところはそうとしか考えられない。しかもこの大量の血だ、とてもじゃないが生きてはいまい。和彦といつもいがみ合っている武上だが、さすがに今回ばかりは言葉に詰まった。

すると、武上の後ろから目に涙をいっぱい溜めた小杉が震えながら現れた。

「岩城様・・・大変申し訳ありません。私がここを離れた15分ほどの間にこんなことに・・・お詫びのしようもありません」

和彦は無言で小杉を見た。

KAZUモードの和彦なら「小杉さんの責任じゃありませんよ」と言うだろうし、素の和彦なら「てめー、何やってたんだよ！」と言

うだろう。

しかし和彦は何も言わなかった。ただ黙って小杉を見た後、視線を再び血まみれのフィッティングルームに向けた。

小杉はそれ以上言葉が出てこず、その場で俯くことしかできない。

と、また武上の後ろから女性の声がした。ただし今度は和彦のよく知っている声だ。

「和彦さん」

「・・・寿々菜？」

見ると、武上の後ろにある扉から、制服姿の寿々菜がおずおずと顔を出しているではないか。

「何やってんだよ。学校は？」

「もう終わりました。家に帰ってる途中に武上さんから電話を貰って・・・ここに来て欲しいって」

和彦は、武上が寿々菜に小さく頷き鑑識達の方へ歩いて行くのを見て、再び驚いた。

どうやら武上は和彦がショックを受けるのを見越して、和彦を慰めるために寿々菜をここに呼んだらしい。武上に見れば大サービスと言ったところか。もともと寿々菜は自分の役割を余りよく分かっているようではあるが。

「あいつ、余計なことを・・・」

「え？」

「いや、なんでもない」

和彦は息をついて廊下に出ると、壁にもたれた。寿々菜がちょこち

よことその後をついてくる。

「たく、こんな時に寿々菜を呼んだからって、なんだって言うんだ。

しかし和彦は、最初にフィッティングルームの中を見た時よりも自分がだいぶ冷静になっているのに気が付いていた。悔しいが武上の目論見は正しかったらしい。

和彦はいつもの調子で廊下から部屋の中の鑑識の様子を観察した。

「和彦さん・・・大丈夫ですか？」

しかし寿々菜の方が冷静ではなく、目を真っ赤にして和彦に訊ねてくる。

「ああ。大丈夫になったよ、お陰様でな」

「え？」

「それよりなんで寿々菜が泣くんだ？お前は俺のファンだろ？俺の婚約者なんかいなくなった方がいいんじゃないのか？」

「そ、そんなこと！」

寿々菜はいきり立ってから、ぷしゅーっと音を立てそうな勢いでしばんだ。

「あの・・・はい、正直そう思っていました。でもまさか、本当にこんなことになるなんて・・・ごめんなさい、和彦さん」

「何が？」

「きつと私がそんな風に思ってたから、本当になっちゃったんです」

「まさか」

和彦は鼻で笑った。だがさすがにそれはいつものようなニヒルな物にはならなかった。実際に栄子がいなくなってしまったのだ、当然だろう。

2人はそれからしばらく黙って部屋の中を見ていた。武上ら刑事や鑑識達が事務的に作業を進めていく。

寿々菜は何とも言えない気持ちで血まみれのフィッティングルームの中を見回した。そしてその目は壁で止まった。

あ、ウエディングドレス・・・綺麗だな。栄子さん、あれを結婚式で着るつもりだったのかな。

だがおそらくそれはもう叶わないだろう。寿々菜は栄子に嫉妬していた自分を改めて悔いた。和彦が結婚してしまうのは辛い、和彦が悲しんでいるのを見るのはもっと辛い。高井戸薫が言っていた「私は本当にKAZUさんを好きだから、KAZUさんが幸せなら温かく見守るわ」という言葉が思い出された。今なら、薫こそが本当のKAZUファンなのだと認められる。

それに引き換え私は・・・

寿々菜は本当に自分のせいでこんな事件が起きてしまったような気がしてきた。

そして、自分がこの事件を解決しなくてはならないような気もして

きた。

そつよ！私の不純な嫉妬のせいでこの事件が起きたのなら、私が解決しなくっちゃ！

そんなワケない。が、そこは単純な寿々菜、一度こうと決めたら俄然やる気が出てきた。今度は「何か犯人に繋がるモノはないか」という目でフィッティングルームの中をしてみる。

鑑識たちが、栄子が刺されたと思われるフィッティングルームの中心を丹念に調べ、武上はウエディングドレスを気にしている。

しかし寿々菜が気になったのは・・・

来た。

寿々菜はフィッティングルームの中にある大きな鏡を見て奇妙な違和感を感じた。その鏡も例に漏れず血がべつとりと付いているのだが・・・。

「和彦さん」

「ん？・・・おい、まさか」

和彦が寿々菜の両肩を掴んだ。さすがに和彦も今回はかりは真剣だ。

「違和感、来たのか？」

「はい」

「よし、なんだ？言ってみろ」

残念なことに、寿々菜には違和感の正体を突き止めるほどの観察力・推理力はない。そこは和彦の領分だ。

「鏡です」

「鏡？あのデカイ鏡か？」

「はい。なんだろ・・・あの鏡の血が気になります」

「・・・鏡の血か・・・」

和彦が腕を組み鏡をじっと睨んだその時、廊下が急に騒がしくなった。どうやら親分のお出ましらしい。

和彦は壁から背を浮かせた。

「岩城様」

倉屋兄弟の兄でありTホテルの総支配人である倉屋宗太郎が厳しい表情で和彦に近づいてきた。その後ろから若干のんびりとやってきたのは弟の小次郎だ。2人並んでいるところを見るとますます兄弟には見えない。

「遅くなり、申し訳ありません。この度のことは全てこちらの責任でございます。本当に申し訳ありませんでした」

宗太郎に続き、小次郎も頭を下げる。しかしその深さには随分差があり、小次郎は頭を上げるついでにフィッティングルームの中を見る余裕もあつた。

「あれ？死体は？」

「小次郎！」

宗太郎が慌てて小次郎の脇をつつく。

「失礼なことを言うんじゃない！」

「え？あ、失礼しました・・・？」

小次郎は兄にせかされて頭をかきながら、もう一度お辞儀をした。この状況でこんな発言ができるとは、この小次郎、やはりどこかピントがずれているらしい。和彦も寿々菜も怒るのを通り越して呆れてしまった。

「死体なんかありませんよ。まだ見つかってません」

和彦は、何で俺がこんな説明しなきゃいけないんだ、と思いながらも、一応親切に小次郎に説明してやった。そうでないと、この男はまたとんでもないことを言い出しそうだ。そうになったら和彦も自分を抑える自信がない。

小次郎が驚いた顔をする。

「え？」

「僕の婚約者は行方不明です」

「え？・・・え？そうなんですか？」

「お聞きになってなかったんですか？」

「え、いや、その、詳しくは・・・そうなんですか・・・えっと・・・」

小次郎の目が泳いだ。どうやらようやく状況を理解したようだ。

しかし寿々菜はそんな小次郎を見て、二度目の違和感を覚えていた。



## 第9話 血と鏡

鑑識が作業を終え、部屋に「KEEP OUT」のテープが張り巡らされてようやくこの「騒然」は一段落した。しかし渦中の和彦の心が本当の意味で一段落することはなかった。

それでもいつも通り勝手に現場を歩き回ってみる。

「あの・・・岩城様」

振り向くと、倉屋宗太郎と小杉が並んで立っていた。倉屋小次郎は凄惨な現場に腰を抜かしたのか、さっさとどこかへ退散していつてしまった。

「この度は本当に申し訳ありません」

2人して改めて頭を下げる。話しているのはもちろん宗太郎の方だ。小杉はまだ涙が乾いていない。

和彦は今度は控えめなKAZUSMILEを作って肩をすくめた。

「こちらのホテルの手落ちだとは思ってませんから。むしろ犯人は、結婚に嫉妬した僕のファンかもしれません。もしそうなら、逆に僕がこちらにご迷惑をかけたことになります。こちらこそすみませんでした」

「とんでもありません。仮に岩城様のファンの方のした事だとしても、我々にはそれを防ぐ義務があります。このホテル内で起きた事件・事故の責任は全て我々にあります」

ここまでではつきりと言い切る責任者も珍しい。和彦は、そして部屋

を観察するためというより勝手に動き回る和彦を監視するために残った武上は、宗太郎に感心した。

「いえ、我々ではありません。私の責任です」

小杉がようやく喉を詰まらせながら口を開いた。その目は真っ直ぐ和彦を見ている。

「一生に一度のおめでたい事のお手伝いをさせて頂いているウエディングプランナーの私が、お式を台無しにしてしまうようなことをしてしまい、申し訳ありません」

もう一度頭を下げた小杉の背中に宗太郎が手を置く。

「岩城様、小杉の責任ではありません。ここの責任者は私ですから私の責任です。申し訳ありません」

「宗太郎さん・・・」

小杉が涙目で宗太郎を見上げた。

そう言や小杉は宗太郎に惚れてるんだっとな。

和彦は咳払いをした。

「もう『申し訳ありません』は結構ですから。それより、もう少しホテルの中や外を見て回ってもいいですか？」

「もちろんです。お気がお済みになるまでどこを見て頂いても結構です」

「じゃあ遠慮なく」

和彦は宗太郎と小杉が部屋を出て行くのを見送ると、まだ血で湿ったフイッティングルームにかがみこんだ。寿々菜もその隣に尻を浮かせて座る。

武上も含めて3人とも靴を履いていて、その上からビニール製の靴カバーをつけているが、その全てを通り抜けて血の生暖かさが伝わってくるような気がした。

「さっきのお2人、良い方達ですね」

「だろ？だからこのホテルで結婚式をしようと思ったんだ・・・ってあいつが決めたんだけど」

「そうなんですか・・・」

寿々菜は胸苦しさを覚えた。

和彦と栄子は2人でどんな時間を重ねてきたのだろう。そしてこれから先、再び2人の時間が重なることはあるのだろうか。

「和彦さ、」

「さっき寿々菜が違和感を感じるって言ってたのは、この鏡だよな？」

和彦が寿々菜の言葉を遮って顔を上げ、鏡を見た。そこには血がべつとりとついたままになっている。

「あ、はい」

「本当ですか、寿々菜さん？」

これには武上も食いついた。寿々菜の「違和感」は証拠にはならないが、いつも事件解決の糸口に繋がるのだ。

「はい。でも、やっぱりどうして違和感があるのかは分からないんですけど」

「充分ですよ」

武上も鏡に近づいた。大きいということと、血が流れるように付いているということ以外、特に変わったところはないように思える。

寿々菜は栄子になったつもりで鏡の前に立った。

「栄子さんはここでウエディングドレスを試着してたんですよね？」

「ああ。でも小杉の話によると、フィッティングルームに持ち込んだドレスはその壁に掛けてあるやつだけらしいから、まだ試着はしてなかったんだろうな。もしくは、試着を終えた後だったか」

「試着はまだだったと思います」

「どうして？」

「え、だってこんな綺麗なドレス、一回着たらなかなか脱ぎにくくなっちゃうじゃないですか。きつと何分間も着たまま鏡で自分の姿を見てると思います。小杉さんが15分ほどで戻ってきたということを見ると、着る前だったんじゃないでしょうか」

「ふーん。そんなもんかね」

仕事で常に「早着替え」を強いられている和彦にその気持ちは分からない。ついでに普通の男である武上にも分からないのが、「寿々菜さんがそう言うのなら、きっとそうなのだろう」となんととも刑事らしくないことを考えた。

「でも確かに、1人でこのドレスを試着しようと思っただけで脱ぐだけでも時間がかかるでしょうから、寿々菜さんの言う通り着る前だったんでしょうね」

「わかんねーぞ。ドレス姿のところを刺されたのかもしれない」  
「それで犯人がドレスを脱がせて壁に掛けたのか？そんなことはないだろ。もし栄子さんを連れ去るのにドレスが邪魔なら脱がせて床に放っておくはずだ。それにドレスは血で汚れてるが、破れてはいない」

武上は言ってしまったてから和彦の様子が気になったが、和彦は無理をしているのか表情を動かさない。

「つーことは、小杉が出て行つてすぐに犯人はここに入ってきたってことか」

「・・・そういうことになるだろうな」

寿々菜は2人のやり取りを聞いた後、気を取り直して再び想像を始めた。

「ドレスに着替えようと思ってここに立つて鏡を見る・・・栄子さんは犯人を見たんでしょうか？」

「フィッティングルームの扉は鏡とは反対側にあるから、犯人が入ってきた時に鏡に映った犯人を見たかもしれないな」

「着替えようとしたら扉が開いて、誰かが入ってきたのが鏡に映る・・・」

寿々菜はパツと後ろを振り返った。

「当然、栄子さんはこうやって振り返りますよね」  
「だろうな」

「いや、振り返るとは限りませんよ」

武上が補足する。

「フィッティングルームに入ってきてても不思議じゃない人物だとしたら、栄子さんは鏡の方を向いたままかもしれません」

「振り返ったとしたら胸を、振り返らなかったとしたら背中を刺した、ってことだな」

「まあ・・・そう、かもな」

武上は言葉を濁したが、和彦は何か思うところがあるらしく、寿々菜の横に立った。

「どちらにしろ、犯人は扉を開いてフィッティングルームに入った。鏡は扉の真向かいにある」

「・・・そうか。そして栄子さんは犯人と鏡の間に立っていた。犯人が栄子さんを刺しても、鏡に血は付かないはずだ」

「え、でも」

寿々菜は鏡を指差した。

「血が飛び散って付くことはあるんじゃないですか？」

「鏡に付いてる血の量を見ている。飛び散ったなんてレベルじゃないだろ」

「じゃあ・・・刺された栄子さんがよろけて鏡にぶつかって、その時血が付いたとか・・・」

「それなら、鏡に付いた血の跡は擦れたようになってるはずですよ。当然その後栄子さんは床に崩れたでしょうからね。だけどこの血の跡はどちらでもない。まるで・・・」

「まるで？」

武上は一呼吸置いて寿々菜と和彦を見て言った。

「まるで、バケツで血をかけたみたいだ」

寿々菜は背中に寒いものが走ったような気がして、身震いをした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2850x/>

---

アイドル探偵 9 「和彦の結婚」編

2011年11月24日21時48分発行